

いじめ・不登校問題と子どもの人権

高橋 温

司会 法学研究所が主催しまして、今週と来週、二週間にわたりまして連続講演会を開催いたします。その共通のテーマが「子どもの福祉と家族・地域・自治体」というものです。この神奈川大学の法学部は自治行政学科という、全国でも非常にまれなんですけれども、地方自治、地域を大切にする学部を置いておりまして、その関係で地元の神奈川、横浜の地域の中で活動していらっしゃる方、今回は大人だけでなく子どもも含めて、この場にお呼びして、そして大いに語っていただくと考えました。

今週はお二人の専門家をお迎えし、来週は実際に子どもたちに来ていただきます。子どもたちといっても、大学生も含まれていますけれども……。今週の話と来週の話にうまくつながっていかばと思っています。

きょうは最初に、高橋弁護士からいじめ・不登校の問題等をお話いただき、そして、その後のセッションで子どもの虐待の問題というふうに進めていこうと思っております。

高橋温弁護士は、新横浜法律事務所といまして、新横浜の駅前にある非常にきれいな事務所で活躍されています。弁護士の方です。一目ごらんになるとおわかりになりますが、非常にお若くて、どんどん本音で皆様にお話くださると思いますので、きょういらっしゃる方もぜひお話を伺った後、三十分ほど質疑応答の時間を設けてあります。そこで、ふだん思っていることを、あるいはきょうお話を聞いて、聞いてみたいというようなことを、余りかたくならずにどんどん

質問なさってみて下さい。この講演会の趣旨の一つもそうなんですけれども、できるだけ実質的に本音で交流できる、そういう場になればと思います。

高橋温弁護士は、日弁連の子どもの権利委員会で幹事をしていらっしゃるだけでなく、神奈川県の子童相談所の嘱託としても活躍されていらっしゃる。この分野においては、お若いのですけれども、最先端の活躍、活動をされていらっしゃる方です。ぜひ第一線の現場で活動していらっしゃる専門家のお話を伺って、そして皆さんの方からたくさん意見なりコメントなり質問を高橋弁護士にぶつけて、そしてこの場を実りあるものにしていただければと思います。

では、高橋さん、よろしく願いいたします。

高橋 今ご紹介いただきました弁護士の高橋温です。今阿部先生に言っていたんですが、余りかたい話をかたいスタイルするのは得意ではないので、ざつくばらんとお話をできればなと思っています。

私自身のことを最初に少しご説明した方がいいのかなと思いますが、弁護士になって六年になりました。弁護士になるときは、まさかこんなに子どもの問題にかかわるとは私は思っていなくて、弁護士になったら、きつとオフィスでかい机の前に座って、のんびり契約書を眺めて、夕方になったら飲みに行ける生活が待っているかと思いましたが、実際はそうでもなくて。

子どもの問題にかかわるようになったきっかけは、一番最初はやはり少年事件。少年事件で、刑事事件を起こして捕まった子どもの付添人というんですけれども、いわゆる刑事事件の弁護人のようなことをやって、そこから子どもが今置かれている問題ですとか、状況ですとか、そういうものに少しずつ関心を持つようになりました。

その次に、本格的なきっかけになったのは、高校をやめさせられた、一応自主退学という形をとったんですけれども、学校側から、やめないんだったらもう退学処分にしますよということを言われてやめさせられた子がいて、その子がどうも納

得がいけないということで、学校を相手に訴訟を考えたんですね。それをある弁護士が受けまして、その弁護士が自分一人でやるのはということで、ほかの弁護士にいろいろ声をかけたんです。声をかけた中に、私と、きょう後からいらつしやる影山先生と、二人とも入っていました。その事件で学校の問題、校則の問題ですとか、学校の問題とか、そういうものになり興味を持って裁判をやったと。

そこで、僕、影山先生に会ったのが運のつきで、そうしたら、今度、影山先生が、ここに一人若手でこういうのがいるというふうに見つけちゃったものですから、子どもの虐待について弁護士会でシンポジウムをやるから準備委員をやれというふうに言われまして、後で来ますけれども、僕より影山先生の方が年は上なんです。期も上なんです。要するに先輩なんです。先輩の命令が来たわけですね。おまえ行ってこいと言われまして。で、今度、子どもの虐待のそういう委員をやるようになりまして、虐待の問題をやると。少年非行をやって、学校の問題をやって、虐待の問題をやると、一通り子どもの問題に関する基本的なところというのはやることになっちゃったわけですよ。そこまでやると、今度は、じゃ、日弁連という弁護士の全国の委員が集まってくるのがあるから、その下働きに出ると言われまして、今やっている日弁連の幹事という立場になりました。

こんな感じで、自分が興味があったからそこまで来たんですけども、弁護士になるときにそういうことを考えていたというよりは、なつてから実際に目の前に出てきた問題を見ながら、これは、ううん、まずいんじゃないの、これはおかしいんじゃないのっていう、そういう感覚でいろんなことに取り組んできて今のところにいるという、そういうような感じがします。

レジュメの方にいらさせていただけますが、今ちよつと導入でお話をしたんですけども、弁護士がこんなところに話に来て一体何なんだという感覚が常識だと思うんですね。一体弁護士というのは何をやっていて、子どもの人権とかいじめ、

不登校とかいうけれども、どういう関係を持っているのか、どういうかわり方をしているのか、そういうことを最初にちよつとご説明をしたいと思います。それが1で書いた、弁護士はどんな場面で子どもの権利にかかわっているかというところです。

①としてどんな問題でかかわることがあるのかということを書いてあるんですけども、一つ目、これはきょうのテーマでもあるいじめとか不登校の問題に関してかかわることがあります。二つ目、体罰、校則、さっき今話の中で出てきた校則の問題ですね。退学処分ですとか、こういう問題でかかわることもあります。それと三つ目、学校とか公園で事故があつて、時々新聞に載りますね。部活動で子どもが死んじゃったとか、公園のブランコで子どもが亡くなったとか、こういう問題のときにかかわるときもあります。それと四つ目、少年非行。かつあげをしただとか、強盗致傷だとか、窃盗だとか、覚せい剤だとか、そういうことをやって警察に捕まった子どもをめぐる問題でかかわることがあります。それと、五番目、児童虐待、あと、親との関係ということもあります。ほかにも幾つかあるんですけども、こういう場面でかかわります。

具体的に言うとかかわるのかということなんですけれども、例えばいじめ、不登校の問題ですね。うちの子がいじめられていますっていうふうに親が相談に来る場合、それから僕がいじめを受けていますと言って、弁護士会でやっている人権相談とか電話相談に本人が電話をかけてきてくれる場合、それから、いじめとか不登校が原因で、もう学校に行けなくなってやめちゃったような場合、そういうSOSが、弁護士の会の相談ですとか、知り合いの人からのツテで、AさんがBさんを紹介してきて、Bさんちの子どもが今こういうことになっていて困っているみたいなんです、こういう紹介で弁護士のところにどこからか話が入ってくるんですね。

そのときに何をやってあげられるのか。ケースによっていろいろなんですけれども、一番弁護士が多くやるのは、まず学校とのコーディネートができるかどうか。学校の方で対応をとってもらえて、いじめがなくなっていくのであれば、まずそ

ういう努力をやってみます。それができない場合、もしくは、もうそういう場面ではなくて、いじめが原因で子ども自身が死んじゃって、もう今からコーディネートしていじめをなくしてくださいというような場面でない場合。こういうとき何をするかというと、そのときの残された親御さんの気持ちの中で一番強いのは、どうして、どうしてうちの子は死ななきゃならなかったのか。どうして死んじゃったのか。どうしてこんなことが起こったのか。それが知りたいと言っんですね。

怒っているんじゃないですよ、最初は。最初は知りたいんです。裁判になるときは、もう怒っているんですけれども、最初は何でっていう気持ちなんですよ。何でだか教えてくださいと。教えてほしい相手はだれかと思ったら、いじめた子だし、いじめのあった現場の学校。だからその人たちに聞くんですよ。どうしてこうなっちゃったのか。いつからあったのか、どんなことがあったのか教えてください、私は親だったけれどもわかりませんでしたっていう人が、そういうふうに言うんですね。

そのときに、後の方で出ますが、学校の方はなかなか調査をしてくれないし、とりあえず何かをやって、形をつくって答えを出して、こういうことでしたと。例えばアンケートをとって見たらこんな感じでしたと。学校としてはわかりませんでしたとか、そういう答えが返ってきちゃうことが非常に多い。それ以上突っ込んだ話し合いがなかなかできない。

ここで話し合いができれば裁判ということは余りないです。だけれども、そこで話ができないケースが非常に多くて、学校としてはわからなかったし、責任もないし、とりあえずアンケートはとったけれども、こういう答えがみんなから返ってきましたぐらいで話が終わっちゃうんです。すると、親御さんとしては納得しないんですよ。こんなに簡単な答えで全部が終わっちゃうんですか、うちの子の問題はそれで全部が終わっちゃうんですか、どうしても納得がいけない。

納得がいけないときに、それ以上細かく調べたい、もしくはいじめた子自身の言葉を聞きたいと思うと、今の世の中できる手続は何かといったら、裁判をやって証人で来てもらう、裁判をやって証拠を出してもらう、そういうことになっちゃ

うんですね。それで裁判という形に発展をしていく。これは典型的ないじめの場合、いじめで子どもが死んでいる場合の裁判に流れていく道筋です。いじめで言うと、例えばそんな感じでかわることになります。

それから、二番目の体罰とか校則とか退学処分とか、学校側の対応にこういう問題がある場合。これもケースによって、まだ学校の中にいる場合と、もう何らかの状況でやめちゃっている場合がありますけれども、例えば損害賠償の請求をするとか、こういう話になる前に、やはり同じように話し合いを一応しようとするんですね。どうしておたくの学校はこんなことになっちゃうんですかと。例えば退学処分にしますよと言われていて、まだ学校をやめさせられていなければ、いや、このケースで退学処分はちょっとかわいそうじゃないですか、この子が今この学校をやめて、例えば高校だったりすると、この学校をやめて次に行くところがありますか、実際ないでしょう、そうしたらこの子はどうなっちゃうんですかというような話をして、そこで学校が考え直してくれば、その話はそこで終わるんですね。弁護士が入って話をして、何とか話がまとまって終わります。

だけれども、学校の方でそれを納得をしなくて、いやいや、うちの学校がやっていることは間違っていない、こいつはもうどうしようもない生徒で見捨てるしかないんですというふうに言われちゃうと、まあ、そうはつきりは言わないんですけども、ほかにいい道はいっぱいあるからいいんじゃないの。はつきり言って大人のずるい言い方なんですけれどもね。そういう言い方をして、ほかにこの子に合った道があるよと言われて、おっぴり出されるわけです。そうすると、やっぱり納得いきませんから、裁判になっちゃいますね。

校則とか退学処分だと、そういう民事の問題で済みますけれども、例えば体罰だったりすると、これは単純に民事事件でお金をくださいという話だけではなくて、たたかれていますから暴行罪です。けがをすれば傷害罪ですし、これは学校の中でやろうが、家の中で家庭内虐待でやろうが、やっていることはみんな同じですから、刑法に書いてあるとおりです。

よ。暴行罪だし傷害罪だし。そういうことを問題にしようと思えば、それは本人が思えばですね。弁護士が思ってもしようがないんですけども、本人がそこまで問題にしようと思えば刑事告訴をするとか、そういうこともあり得ます。ただ、実際、体罰で刑事告訴というのは、僕自身は直接聞いたこともないですし、間接的にもちよつと聞いたことはないですね。

三番目、学校とか公園における事故。これは基本的には管理責任を追及することが多いです。どうしてもこうなっちゃったのかというような話をして、その上で、実際に事故が起こってけがをして、その子が生活をしていく上で困っているわけですからね。だれが金銭的な意味の面倒を見るのか。実際の世話をするのは、どうしても親だったり家族になりますけれども、それを支えていくお金はだれが出すのか。その問題になります。

四番目、少年非行。これは典型的な例で言えば、先ほど言ったように、捕まった子がいて、その子の言い分を出してあげるということですね。その子の言い分というのは、大きく言うと二通りあって、自分は悪いことはしていないけれども間違つて捕まっちゃったと。友達が何かやっていたのかもしれないけれども、全然知らないんだけれども、たまたまお巡りさんが来たとき横にいたから一緒に捕まっちゃう子とか、実際います。そういう、自分はやっていないのに捕まっちゃったという子どもの言い分を通してあげるとき。

これがいわゆる刑事で言うが無罪を争うということになりますけれども、そういう言い分を通してあげるときと、圧倒的に多いのはもう一つの方で、やったことはやりました、間違いないです、だけれども、どうしてもそこでそういうことをやっちゃったのか、やっちゃった後何を考えたのか、そういうことをもうちよつと裁判所にわかってもらいたい、その上で自分がどういうふうになるのか。例えば少年院に行くのか、行かないで済むのか、行かないで済むんだしたら何をしなければいけないのか、裁判所の判断をもらうときに、何をどこまで考えたのか、どんな子なのかをわかってもらう、そういう手助けをするというのがあります。

五番目、虐待。これは多分後半で詳しくやと思うんですが、基本的というか、僕らが今やっている一番多いパターンは、虐待される子ども側に直接は立たないで、大体が児童相談所のバックアップをするというのが、今は一番多いパターンです。ただ、例えば、十五、六とか十七、八の子、女の子には限らないんですけども、その子が性的虐待をずっと親から受けていたとか、そういうときだと、その子自身が何を望むかで損害賠償の請求をしたり、親に対して刑事告訴をしたり、そういうときもあります。そのときは直接その子と話し合いをしますね。そんな感じでいろいろやっています。

あと、少年非行とかで多いのは、子どもが捕まっちゃっていますから、かわりに謝りに行って、済みませんでした、彼も本当に反省していますから許してくださいという、許してくださいがメインではないんですけども、許してくださいまでくっつきましてもね。被害者のところまで謝りに行くということはやります。これは二つの意味があって、最近、被害者問題も同じく世の中でクローズアップされていますけれども、一つは、被害者にも意味がある作業だと僕たちは思っています。被害者の言い分を聞いて、それをもう一回子どもに返す。どんなに怖かったか、どう思ったのか、事件があって何を考えているのか。

例えば、ひったくりに遭ったおばあちゃんのところに行ったりとかするんですよ。そうすると、うちにも孫がいます、だからわかりますというふうには言ってはくれます。だけれども、そのおばあちゃんがもう一方で思っているのは、歩くの怖いと。道を歩いて商店街に買い物に行く途中でバイクでひったくりに遭ったんですね。おばあちゃんはすぐに荷物を離したから転ばないで済んだんですけども、でも歩くの怖いと。後ろからバイクが来ると、もう怖くて、さっと道の端によけちゃって、じっと立って待っているんだと言うんですね。

それが、事件があって三週間ぐらい後に僕が会いに行ったとき、まだそう言っていましたから、そういうすごい嫌な気持ち、その場だけじゃなくてその後々に残っていく嫌な気持ち、そういうことを聞いて帰って子どもに伝えるんですよ。おば

あちゃん、こう言っていたよ、自分にも孫がいるからわかりますとも言っていたよ、だけれども怖いって言っているよ、道を歩くの怖いって、こういうふうに言っているよって言うふうに伝えると、子どもは自分がやったことが少しわかるわけですね。その場だけ悪かったんじゃないかって、その後にも迷惑かけているとかってというのがわかるんです。これを伝えるというのが一つ、示談交渉とかに行く大きな意味があると思います。

もう一つは、その子どもがどんな子どもなのかということ伝える。これはきょうの結論になるんですけども、何をやっている子どもでも、どんな子どもでも、非行した子どもでも、いじめっ子でも、みんな子どもというのは基本的には同じなんです。エイリアンがまざっているわけじゃないですよ。きょうここにいる人も、みんな同じように育ってきたわけじゃないですか。赤ん坊から来て、今どこにいるかというのは違いますが、みんなが同じように育ってきた。例えば、どこかで違って、一人だけが全然違う境遇で、全然違う育ち方をして、全然違う思考回路を持っていて、全然違う身体能力を持っています、念じただけで人が殺せるとか、そういう人は世の中にいないですよ。みんな同じなんです、基本的には。ベースは同じ。それで一人一人がちよつとずつ違うんですね。

モンスターがまざっているわけじゃなくて、何をやった、かにをやったと言って、新聞報道とか見ると、すごい子がいるなと思うのは、第一感で思うのはいいんですけども、よくよく話を聞くと、どこかでみんな連続しているんですね。それをわかってもらうんですよ、被害者の人にも。この子がどんな子で、どんなふうに育ってきて、何を考えてこういうことをやっちゃったのか、今どんなふうに思っているのか、これを伝えることで、少しでもそこをわかってもらいたいんですね。

被害者の人からすれば、そういうことがわからない状態だと本当に怖いんですよ。ただ者じゃないと。すごいやつにやられたというふうに感覚としては思っていますから、とんでもない子がいると。一方では孫がいるからわかりますと言っても、

もう一方では、うちの孫とは根本的に違うんだという感覚がありますからね。そうじゃないんですよということをわかってもらいたいです。この子も普通にこういう境遇で育ってきて、こういうことを考えて、こういう苦勞をしてきて、今ここにいて、そして悪いことをやった子なんですという、それをわかってもらう。その作業をやっています。

いろいろ、いろいろ言っていますけれども、あと、弁護士が関係してくるやり方とかパターンとしては、②の活動類型別のところで書きました五番目の行政事件と六番目の人権救済申立事件というのが、多分ちよつとぴんときないと思うので、ちよつとだけ説明をすると、五番目の行政事件というのは、典型的なパターンで言うのは、内申書の開示をしてくださいと。例えば、自分の学校で中学時代、高校時代の内申書がどう書かれているのか全然わからないまま受験をして落ちた。やつぱり納得いかないっていう、開示の場合にですね。内申書の開示をしてくださいと言って、最初はこれも裁判じゃなくて、ちやんとした手続があるんですけれども、行政に手続で出したら嫌だよと。出せませんと言われちゃうと裁判をやるしかなくて、行政事件になったりします。

それから、六番目、人権救済申立事件と書いていますけれども、これはいろんな機関が人権救済申し立てというのを受け付けています。一番近いというか、地元で言えば横浜弁護士会もやっています。何か困ったことというのが、人権を侵害されるようなことがあって、それを救済してもらいたいと思えば弁護士会に申し立てをするということが出来ます。日弁連という全国団体もやっています。それから、法務省にも必ず人権擁護課というのがあって、法務局単位で申し立てを受け付けています。

ここに二つ、所沢高校と恩寵園と書きましたけれども、所沢高校の事件って知っていますか。知らないですか。二年ぐらいい前に問題になったんですけれども、卒業式と入学式をどうやるのか。もうちよつと具体的に言うと、国旗・国歌をどうするかという問題で、生徒と学校が意見が割れたんですね。学校といっても校長先生なんですけれども、学校の中でも今まで

どおり国旗・国歌なしでいいじゃないのというふうに、一般の教職員が言っていたんですけれども、その前の年に来た校長先生が、自分の意見がはっきりしていて、絶対だめだ、国旗・国歌なしではやらんということを書いて、それに対して生徒が、今までうちの学校はずっと話し合いでいろんなことを決めてきたじゃないかと。それを校長先生がかわったから一方的にそう言うのはおかしいんじゃないんですかと言ったんですけれども、校長先生は、いや、意地でもやると言って強行したんですね。それが卒業式だったんですよ。

在校生が納得しなくて、だったら入学式はもうボイコットだと。校長がそういうやり方をするんだつらつき合う必要はないと言って、新しく来る新入生に対して入学式は出るなど言ったんですね。そうしたら、学校が怒って、入学式に来ないやつは入学させないとか言い出して、そこまで大もめにもめまして、結局、所沢高校の在校生がいろんなところに相談をしていく中で、弁護士のツテができて、その弁護士のアドバイスがあつて、日弁連に人権救済の申し立てというのをしました。

非常に難しいんですけども、これは、ある程度の意見は日弁連の方としては出して、やっぱり話し合いをして今までやってきたものを一方的に結論を押しつけるというのは民主的じゃないんじゃないんですかというような意見を学校側に返しています。

恩寵園という事件は、これは横浜では余りメジャーになっていないかもしれませんが、千葉に親の身寄りがない子とか、虐待を受けた子とか、そういう子が入る児童擁護施設があります。それが恩寵園という名前なんですけれども、施設の中で子どもに対して虐待があるんですね。虐待されて逃げてきた子が入っている施設なんですけれども、その中で先生にぶん殴られたりとかしちゃうんですよ。最初は、行き場所がないですから、親がいなかったり虐待を受けたりして、要するに育ててくれる環境がないから施設に来ているわけですから、多少のことがあっても我慢するしかないというふうに最初は

子どもたちは考えて我慢をしていたんですけれども、何年も続きますし、余りひどい状況なので、みんなで集団脱走をしたんです。それから社会問題として発覚をして、やっぱり子どもの側につけてくれた弁護士というのが出てきて、これも人権救済の申し立てというのをやりました。

結果的には人権救済申し立てではらちがあかなくて、そういうひどい園をやっている園長に、これは公立ですから、公金ですよ。税金から出てきたお金を給料として渡しているわけですから、お金を払っていると。これはおかしいじゃないかということで、公金の支出がおかしいという裁判まで出しました。そこまでやらないと状況が変わらなかったんですけれども、そこまでやって、確かに裁判所の方で認定をしてくれて、確かに虐待みたいなことはあったし、それで対策をとっていないのはおかしいんじゃないのというような結論が出ました。けれども、その裁判になる前の段階で子どもたちの中から出したのが人権救済の申し立てというやり方です。

あとは、七番は、さつきちよつと話したような感じなのでいいと思うんですが、それと、八番、九番。弁護士会として社会へ働きかけというのはN G Oの一員として活動というのがありますが、八番目の弁護士会として社会へ働きかけというのは、広い意味で言うと、きょう僕がここに来ているのもそんなようなものかもしれないんですが、弁護士会として頼まれたわけではないんですけれども、弁護士というのは基本的には八百屋さんと一緒なんですよ。

僕はよく依頼者の人にそういう説明をするんですが、私は私で一軒の八百屋さんをやっているんですね。問題を解決するというサービスがトマトであったり大根であったり、要するに一商店なんですね。それなのに横浜弁護士会とか日本弁護士連合会とかっていう名前が、肩書がくっついてきますけれども、これは何かというと八百屋の団体です。八百屋さんが商店街でまとまって団体をつくっているんだと思ってください。みんなでもっと八百屋が売れるように、もっと八百屋がいいサービスを提供できるようにということをやっているわけです。それが弁護士会というものだと思っていただければいいです。

八百屋さんが集まって会をつくっていますから、消費税を値上げすると言われれば、八百屋の団体としては、消費税値上げされるとトマトの売れ行きが落ちますからやめてくれというふうに反対運動をしますね。八百屋さんだったら例えばそういうことをやります。それとおなじです。弁護士会もみんなが集まってやっていて、少年法が悪い方に変えられますと言われると、それは子どもにとってかわいそうですし、自分たちが提供してあげられるサービスの質も落ちますから、やめてくださいと言って反対運動する。これを八百屋が一軒ずつでやるんじゃないくて、みんなが集まった会としてやる、こういう活動をいろんなところでやっています。

子どもの虐待の問題もそうですし、少年法の問題もそうですし、子どもの人権だけでなく公害の問題とかでもやっていますし、いろんなところでやっています。いろんな人権問題でやっていますし、人権問題以外でもやっています。そういう活動をやるんですけれどもね。というのは、今言ったみたいに組合ですから、八百屋の組合と同じですから自分の負担でやる。平たく言うと、この活動をやっているときにはお金はどこからも出ないですね。基本的には出ないです。今日みたいに呼ばれて来るとお金をもらえるんですけれども、少しーいや、いっぱいもらえるんですけれども、基本的にそうじゃなくて、こちらから押しかけていくときは金くれとは言えませんから、だれかに会いに行ったり、いろんな活動をしたり、ピラを配ったり、企画を組んだり、シンポジウムをやったり、こういうのは基本的には自分たちの負担でやっています。クラスで言う図書委員とか新聞委員とか、そういうものだと思います。ボランティアでやるものです。

弁護士会という団体でそういうことをやるときもあれば、弁護士会という団体以外のところでやることもあります。それが九番目のNGOの一員として活動というふうに書いたものです。子ども虐待防止センターという虐待に関する団体があるんですけれども、例えばそこに行つて、ほかのいろんな立場の人と一緒に虐待の問題についていろんな活動をするし、相談に乗ったりシンポジウムを開いたり、立法に対して意見を言ったり、そういうようなことをやっている弁護士もいま

す。

という感じで、ちょっと長くなったんですが、弁護士は一体子どもの人権にどうかかわっているのかということを、ざっと説明をさせてもらいました。

きょうのテーマに入るんですけども、いじめと不登校の問題ということがきょうのテーマになっていますね。まず、いじめという問題から考えたいと思うんですが、もう社会的にいじめという言葉が何となく一定のものを指すというふうには、皆さんも感覚としてはあると思うんですけども、よく裁判になって言われるのは、こちらがいじめだと言うと、学校とか相手方が言うのは、いや、悪ふざけです、いじめではなくて悪ふざけです。ふざけがちょっと度が過ぎました、これは典型的なパターンです。だから、いじめというものが非常に、言葉を聞いて簡単に「簡単」というか、はつきりわかるものなのかというと、裁判をやってみると、こちらがいじめだと言っているものに対して、向こうは悪ふざけだという返事をするんですね。時々、裁判所によっては、こちらはいじめだと言っているのも、いや、あれはやっぱ悪ふざけの域を出ていませんでしたみたいなことを言われちゃうことがあります。だから、いじめなのかいじめでないのかということは、わかりやすそうに思えて、実はあんまりわかりやすくないです。

それで、いじめの定義と特徴ということを最初に書かせてもらいました。いじめとは、これは裁判所の判例で出ている一つの定義なんですけれども、学校及びその周辺において生徒の間で一定の者から特定の者に対し、集中的、継続的に繰り返される心理的、物理的、暴力的な苦痛を与える行為を総称するものであり、具体的には、心理的なものとして仲間外れ、無視、悪口などが、物理的なものとして物を隠す、物を壊すなどが、暴力的なものとして殴る、けるなどが考えられるというふうに東京地裁の八王子支部が平成三年のときにはそういうふうに言っています。裁判所も一件ずつ違いますから、裁判官によって、こういう中身はちょっとずつ違いますけれども、一つの参考例だというふうに考えてください。

定義というのは、法律があればそれが一応定義だと言って、社会の全員で同じことを考えられますけれども、いじめに關する定義の法律というのは今ないですから、ばらばらです。国の中でもばらばらです。下にちっちゃな字で書いてあつて、多分つぶれていて読みにくいと思うんですけれども、文部科学省が言ういじめというのは、自分より弱い者に対して一方的に身体的、心理的な攻撃を継続的に加え、相手が深刻な苦痛を感じているものであつて、学校としてその事実を確認しているもの。なお、起こった場所は学校の内外を問わないものとする。文部科学省はこれがいじめだというふうに決めて統計をとっています。

よく批判の対象になるのが、学校としてその事実を確認しているものというふうに書いてあるんですけれども、学校が知らないといじめじゃないのかと。それはおかしいですね。ただ、統計をとる以上、こういう書き方になっているんだろうとは思ふんですけれども、ここはもうしよつちゅう批判をされています。

警察が言ういじめというのは、またちよつと違ふんですね。警察庁は、単独または複数で単数あるいは複数の特定人に対して身体に対する物理的攻撃または言動によるおどし、嫌がらせ、仲間外れ、無視等の心理的圧迫を反復継続して行うことにより苦痛を与えること、ただし、番長グループや暴走族同士による対立抗争を除くと言われています。

言っていることがみんなばらばらですね。近いことを言っていますけれども、ちよつとずつ定義は違います。何が大事なのかということなんですけれども、僕らの一番ポイントだと思つている部分はどこかといえば、やられている子がいじめだと思えば基本的にはそれはいじめだ、そういうふうにとらえています。やっている子がどう思っているかじゃなくて、やられている子がいじめられていると思うのであれば、それが基本的にいじめに当たる。ここを外したらいけないと思つています。相手がどう思うかじゃなくて、こちらがどう思うか、被害者側がね。これは大事にしてあげなきゃいけないことだというふうに考えます。

それで、基本的には悪ふざけかいいじめなのかというふうな、その区別をするべきだとは思っただけですけど、もう一つ、いじめというときに特徴的なものとして、いじめている子、加害者と言いますが、いじめている子といじめられている子、被害者のほかに、観衆と傍観者という立場の人たちがいて、その四つの立場で成り立っているのがいじめである。これが特徴的な部分ですね。現代のいじめの非常に特徴的な部分です。

観衆というのはどういう子どもたち、人たちのことを言うかと言うと、直接いじめには加わらないけれども、周りではやしたりおもしろがって見ている子どもたちのこと。何となくわかりますよね。皆さんの感覚の中にもあると思うんですが、自分自身が何かを直接その子がやっているわけじゃないけれども、やれ、やれえと言ってみたり、笑って横で見えたりとか、そういう子のことを言います。

傍観者、こっちは、内心では良くないなと思っているんだけど、自分が標的にされるのが怖かったりとか、どうしても言い出せなかったりとか、そういう理由があって見て見ぬふりをする子どものこと、こちらが傍観者です。

通常のパターンで言うと、傍観者というのは、例えばクラスの中で言えば圧倒的に多いですね。傍観者がほとんどで、観衆が何人いるかで、あとはいじめている子といじめられている子という、そういう構成になっています。

よく言われているのが、いじめが継続するかどうかというのは、観衆と傍観者がどういう立場をとるかによって随分変わると言われています。例えば、みんなに好かれている子がみんなに嫌われている子から何かをやられていたとしましょう。例えばですよ。そうすると、その周りのみんな、観衆と傍観者は好きな子がやられていたら、おもしろがりませんから、周りではやし立てるといえることではないですから、観衆は少ないですね。すると、傍観者も、自分の好きな子だったら、やめなよというふうな味方についてあげやすいですね。そうすると、A君がB君をいじめていても、それが継続するということは、観衆と傍観者の関係からいうと余り成り立たなくて、単発で終わる可能性の方が高い。

だけれども、すごいわかりやすくするために言うと、逆だとすれば、嫌われている子を好かれている子がいじめていたりすると、観衆、おもしろがってはやし立てる子、あいつ嫌いだから、いいよ、やっちゃえ、やっちゃえみたいな、おもしろがってはやし立てる子もふえてきますし、傍観者、悪いな、悪いことやっているなと思うけれども、でも、まあ、ちょっと言い出しにくいからいいかなと思っちゃう子もふえてくる。こういう関係になりますよね。単純化して言うとそういう関係ですよね。

こういうふうに観衆と傍観者ができ上がってくると、このいじめは続けようと思えば継続的に続きます。そういう、いじめている子といじめられている子の力関係だけじゃなくて、周りの子がどう動くのか、それによっていじめがどれだけ深刻になるのか、長期間続くのかというのは変わってくるというふうに言われています。

それと、もう一つ、ちっちゃい字で書いたのは、学校に来ているから先生の悪口はちっちゃい声で言わなきゃと思って、ちっちゃくしたんですけれども、教師自身がいじめにかかわっているということがかなり多いのではないかというふう到我々は思っています。我々というのはどこなのかと言われると、責任逃れをしているようで悪いんですけれども、先ほど言ったように、横浜弁護士会で子どもに関する人権の相談というのをやっています。毎週一回電話相談を受け付けています。当日来てくれれば直接会っての相談もやっています。これをもうずっと何年もやっているんですけれども、いじめに関する相談というのかなり量が来ているんですね。

それで、その中で話を聞いていくと、どんなことがあったのかという細かな話を聞いていくんですね。こういうことがきっかけで、どんなことがあって、そのとき先生がどういう対応だったのかというのを聞いていくと、学校の先生がいじめのきっかけをつくっているパターン。それから、学校の先生がいじめの子と一緒になっていじめられている子を差別したりとかしているパターン。これが意外に多いという結果が出ました。

最初に言った先生がきっかけをつくるパターンというのは、例えば、小学校で忘れ物の表って、僕らのころにはあったんですけれども、今でもあるのかな。皆さんの時代にあったのかどうか。忘れ物をするとかチェックがついていって、あつ、A君は忘れ物が多いとかっていうのがばれちゃうのがありましたか。なかったですか。そういうのをつくったりするクラスもあるんですね。みんなが忘れ物をしないようにという意味で、先生は悪気はなくてつくるんだと思うんですけれども、例えばそういうものをつくるわけですね。

そうすると、忘れ物表で例えばA君がいっぱいになっていたりすると、A君に対して先生が、おまえ、どうしようもないな、何度言っても忘れてくるんだ、おまえは本当にどうしようもないやつだと例えば言うわけですよ。どうしようもないやつって言われちゃうわけですよ。忘れ物をするのは、まあ、忘れ物をするのがいいことだとは思わないですけれども、でも、それとどうしようもないかどうかというのはまた別の問題なんですね。

それとか、家庭の問題とか親の責任とかがあつて、服を着がえてこれない子、あと、例えば修学旅行のお金が納められない子、そういう子がいると思うんですけれども、そういう子どもに対して先生が、おまえ、いつも汚い格好をしているとか、ついぼろつと言っちゃうんですね。それがどれだけ深刻な結果を招くかということ余り考えないんですね。

でも、子ども集団の中で言うと、先生にそういうふうなレッテルを一度張られると、マイナスのレッテルを先生が張るわけですから、クラスの中で先生っていうのは、尊敬されるかどうかはともかくとして、権力としては一番上ですからね。その人が、あいつは一步下だよというふうにみんなに対して示すわけですよ。汚いとか、お金を持ってこないとか、どうしようもないとかっていうふうに言う、その一言がきっかけになって、なるほど、あいつはおれたちとはちよつと一步下で、いじめてもいいんだなというふうに思っちゃって、それがきっかけで汚い、汚いとみんなに言われたりとか、そういうふうにいじめが始まる。こういうパターンが一つあります。

それから、もう一つは、もっと深刻だと思うんですけど、子ども同士の間でいじめが始まって、子どもが思い悩んで先生に言いに行くわけですね。こういうことをやられて、こうやってこうでこうでというふうに言うんですけども、すると、先生の方が、いろんなパターンがありますけれども、例えばいじめている子というのを呼んできて、どうしてそんなことをやっているんだ、おまえ何をやっているんだと言う。いえいえ、それはA君がこうでこうでこういうことをやったから僕はこういうふうにしただけで、僕が悪いんじゃないやありませんとかっていうふうに、いじめている子がうまく弁解するわけです。すると、先生が、そうか、じゃ、A、おまえが悪いというふうに、先生がいじめている子のしり馬に乗っちゃうんです。

そうすると、いじめている子は味方を得ますから、先生というバックを得ますから、やっぱり大丈夫じゃん、ちよつとぐらいのことをやったって先生がおれの味方だということになっちゃって、先生の方も面倒くさい問題ですから、A君を責めていればいいやと思えば、Aがおまえがしっかりしなきゃいけないんだ、おまえがもつとこうしろ、おまえがもつとこうしろというふうに言って、いじめられている子の方を追い詰めていく、こういうパターンも、ちよつと考えにくいんじゃないかと思うんですけども、実際あります。

さっき、加害者、被害者のほかに観衆、傍観者がいるというふうに言いましたけれども、やっぱりクラスの中でのいじめということで限定して言うと、そのほかに教師がどういいう対応をとるかというのは、そういう意味では非常に大きな要素になっているんじゃないかなというふうに思っています。それで、何で先生がそういう対応になっちゃうのかとか、あと、出だしの方で言いましたけれども、何でいじめがあつて、学校に原因を説明してくれと言っているのに説明してくれないのかとか、そういう問題があると思うんです。

ちよつとずれますけれども、基本的には僕は別に学校が嫌いなわけじゃないですし、学校の先生が頑張っていないと思っ

ているわけでもないですし、すぐく学校の先生も今大変な立場に置かれている。小学校、中学校、みんなそうだと思つています。だから、一人一人の先生の責任だというふうには全然思つていないので、そこはちょっと誤解してほしくないんですけれども、だけれども、学校としてうまくいかない理由は何なんだろうということなんですけれども、一つは、これだけ社会問題になっているにもかかわらず、学校の側のこういういじめの原因とか構造とか、そういうものに関して、きちんとした理解がまだできていないんじゃないかなというのがあります。学校側というか、学校全体としてということですね。そういうことがわかってきてくれている、ある程度うまく対応ができるところは、いじめもそんなに発生しませんし、そういうことの理解が不足しているところだと、やっぱりいじめというのはエスカレートしますし、後々問題になったときの対応も、例えば親に納得のいかない対応しかしてもらえなかったりしますね。

学校をやっぱり、基本的に学校集団というのが一番多いいじめのパターンですから、いじめの本質を理解するという義務、これはどうしてもあると思います。何でそうしなきゃいけないのかというのが、その前提にある、生徒がみんな学校に来て、おんなじ時間そこで集まっているんだから、その子たちが安全で安心して暮らせるようにしなきゃいけない。そういう一般的な義務というのが学校にはあります。

これは学校だけじゃなくて、どこでもそうなんですけれども、判例かなんかで出てくるのが、自衛隊員が自衛隊のトラックの荷台からおっこちちゃったときに、自衛隊に責任があるみたいな話がたしかあったと思うんですけれども、僕はちよつと余り勉強してないので忘れましたが、そういうときでもやっぱり、一つの集団に所属をしているんだったら、その中で生命、身体の安全は確保するというような一般的な義務はこの団体にもあります。同じような意味で学校にもあります。

いじめというのがエスカレートすれば、当然子どもは死にますからね。今はもう世の中でわかってもらえていると思いませんけれども、深刻ないじめが長期間続けば自殺をするというのは一般的なことです。そうだとしたら、そうならないよ

うにする義務というのは、やっぱり学校にはあるわけですよ。そのためには、いじめというのがどんなもので、どういう対応をしなければいけないのかということを理解する義務がありますね。

それから、理解だけして何もしないわけにはいきなりですから、理解をしたら発見をして、子どもたちがどういうことをやっているのかということを把握をする義務も当然出てきます。いじめが発覚をしたんだったら原因を説明しなければいけない。とりあえずアンケート一通とりましたではやっぱりいけない。学校としてはその原因を説明する義務がある。それから、いじめを防止する義務。それと、保護者に報告して協議をする義務、こういうものがあるというふうに考えますし、これは一個の裁判で言われたんじゃないけれども、いろんなところでいっぱいやっている裁判の中で、裁判所がこういう義務があるんじゃないんですかと言ってくれたものをまとめて一個ずつ抜いてきたらこういうふうになりました。

何でいじめが起こるのかということなんですけれども、すごく単純には言えないところなんです、一番一般的にも言われているもので書いたのがこの三つです。

いじめの背景にあるもの。一つ目、人権が理解されていない社会と書きました。僕のきょうの話は、最後はそこに落ちつきたいなと思っているんですけれども、人権というのは一体何なのか。きょうも「いじめ・不登校問題と子どもの人権」ですよね。人権というのは一体何なのか。よく新聞で言われる、子どもが権利、権利と言っているがそれでいいのかみたいなことを言われる。そこで言う権利と人権というのはおんなじなのか、違うのか。違うと思いますよ。いわゆるマスコミで騒がれている問題で出てくる権利、権利という言葉と、本来持っている人権という言葉の意味は違うと思います。

人権というのは、だれかに何かをすることではなくて、だれかに何かをしていいか、いけないか、そういう問題ではなくて、自分が何を持っているか、自分がどこまで守られるべきかという、それが人権の本質です。言っていること、わかりますか。よく、いじめっ子の人権というと、じゃ、いじめっ子が人を殴ってもいいのかと言いますけれども、そんなことはだ

れも言っていないよ。弁護士も言っていない。いじめっ子の弁護士もそこまでは言いません。そんな理屈じゃないです。

少年事件を起こした子どもの人権というと、加害者の人権ばかり言って被害者の人権はどうなっているんだと、よくマスコミの論調でありますけれども、加害者が人権があるから、人権があるから多目に見てくれなんて言っているわけではないですよ。人権があるからやってもいいんだと言っているわけじゃないんです。人権というのは人に何かをやっていいという、そういう問題じゃなくて、自分が何を守られるべきかという、そっち側の問題ですからね。だから、いわゆる、本当にマスコミとか報道とか物事を考えるときにベースに置いてほしい、人権とは何かということを、それは勘違いをしないでほしいのは、その人にどこまでの価値、守られるべきものがあるのかどうかです。

だから、人権という言葉の中にあるのは、もう一つそこからわかってもらえんと思うんですけど、僕の人権にあなたの人権、Aさん、Bさん、Cさんの人権というふうに一人ずつが持っているわけですね。ということは、一人ずつの持っているものというのは、僕とAさんは違うし、僕とBさんは違いますから、みんな違うんですよ。みんな違うと言うと、じゃ、権利の幅が違うのかと言われちゃうとちょっと違うんですけれども、もともと持っている自分という存在は違いますね。男と女というわかりやすいかもしれないですけども、性別は違いますよね。だけれども、男という存在としてやっぱり守られるべきだし、女なら女という存在としてやっぱり守られるべきなんですよ。

男女同権と言ったときに、よくまたこれも履き違えられるのは、女は男とおんなじことができるのかとか、男は女と同じことができるのかとかって、そういう議論をしますよね。子どもが産めるのは女だけだから、女の方が偉いとか、偉くないとかね。そういう問題じゃないんですよ。男と女は違うのは当たり前なんです。僕と皆さんが違うのも当たり前です。一人ずつはもうみんな違うんです。一人ずつはみんな違うのは当たり前で、だけれども守りましょう、それぞれがみんな貴

重ですよというのが、これが人権の考え方の根本です。

世の中の的に言くと、これがなかなかこういうところが理解をされていないんだろかなと。だから、いじめでも一番多いパターンというのは、人と違うところを責める。一人だけ服装が汚いと、汚いと言って責めるわけですね。一人だけ足がのろいと、足がのろいと言って責めるわけですね。一人だけ音痴だと、音痴だと言って責めたりとか、そういう人と違うところを探して責めるというのが、いじめのパターンとしてもきつかけとしては一番多いところなんですけれども、違うことが当たり前なんだということを理解ができない。

これは子どもが理解できていないだけでなく、大人社会もみんな理解できていないんだろかなと思うんですけれども、人と違うことを納得ができていない、これは人権感覚が育っていないということだと思っんです。それがいじめの背景にある。これが一番目の人権が理解されていない社会だということ、そこで言いたいことです。

それから、二番目、子どもたちが抱えるストレスということなんですけれども、これはいろんなストレスの原因があると思うんですけれども、学校に対して言えば、やっぱり学校の、今少なくとも学校全体、教育全体の方向としては、管理主義を強めていくという方向でどうしても動いていると思うので、これはやっぱり管理されるという対象になっていけば、ストレスは感じますよ。当たり前だと思っんですけれども。

それから、そういう問題だけじゃなくて、最近私たちが興味を持っているのは遊びなんですけれども、遊びの問題。子どもの問題の中でも遊びの問題に興味を持っているんですけれども、遊ぶこと一つとっても、自由に時間を忘れて遊ぶということとをどれだけの子どもがどれだけやれているのか。思いつ切り遊ぶ、好きなだけ遊ぶということができているのかという問題。それすらも今の子どもはできていないんじゃないかという。こういう中で、子どもが抱えるストレスというのはやっぱり大きいなというふうに考えています。

三番目、教師の体罰。これは、僕は統計をとっていないので、今増えているのか減っているのか、ちょっとわからないんですけど、依然としてあるだろうなという印象は持っています。体罰は絶対禁止だというような世の中の風潮には大分なってきたいるなとは思いますが、じゃ、今ゼロなのかといったら、そんなことはないなというふうに思っています。

先生が生徒をたたいたりするというのが子どもにとってはストレスのもとにもなりますし、強い者が弱い者を攻撃するというのを先生が率先するわけですから、これはいじめをしてもいいんじゃないかという価値観になってくるんですね。極端に言えば、たたかなきゃいいんだ、先生にたたかれるのは嫌だけれども、たたかなきゃいいから、口だけのいじめはオーケーかなみたいな価値観になりかねないわけですよ。もしくは、先生がたたくんだから、ちょっとぐらい足引かけるとか、別にいいじゃん、そんなに悪いことしてないよ、先生だってたたいてるじゃんっていう、そういうことになりかねないわけですね。

いじめの問題、ちょっとざあつと話をしてきたんですけども、横浜弁護士会で統計をとっていて、減っているようにはとも見えません。過去四年間の統計と、その前の四年間の統計というのを比較をしているんですけども、二つぐらいの統計が、四年間で横浜弁護士会に持ってこられたケースが七一件だったんですけども、ここ最近の四年間の方が八八件で、増加率で言うとなん%だろう、二〇%ぐらいふえているということになっちゃいますね。相談がふえたことが全部、いじめがふえているというふうには単純には見えなくてですけども、そういうふうになんとかも電話相談はふえています。

それで、電話の相談を受けて何とかしてあげられるケースというのは、正直言って非常に少ないです。これは弁護士が何とかしてあげられる問題なのかと言われると、アドバイスはできますし、いろんなことを言ってあげる、どうしてもだったら学校に行かなくてもいいということも選択肢の中にあるでしょうし、そういうことも含めていろんなアドバイスをしてあ

げることではできませんけれども、弁護士が学校に乗り込んでいって、教室に行つて、この子をいじめているのはだれだなんてやつたつて、全然意味がないわけですよ。

さっき言つた観衆と傍観者がどう動くかというのが非常に大きな問題なので、基本的にこのいじめの問題をなくしていくには、観衆を減らして傍観者を減らす。つまり、悪いことをやっているときに、やめなよつて言つてあげたり、否定的な態度を示してくれたりする感覚の子どもをふやしていく。これが、地道なようですけども根本的な解決手段だし、基本的にはその方向での解決しかないんじゃないのかなというのが私の感想です。それを支えるために、さっき言つたいじめの背景にあるものというのをできるだけ取り除いていく、人権感覚を身につけてもらつてストレスを減らしてあげる、それによつて加害者も減るんじゃないか、そういうふうを考えています。

次に、不登校についてなんですが、まず、不登校という言葉と、よく出てくるもう一つの言葉として登校拒否というのがあるので、その違いだけ確認をしますが、不登校というのは、何らかの心理的、環境的要因によつて登校しないか、登校したくてもできない状態を言う。一方、登校拒否は、学校嫌いを理由に年間五〇日以上欠席することを言う。つまり、積極的に学校に行かない場合は登校拒否で、学校に行けない場合、学校に行けない場合つてどんなのがあるのかというのは、心理的に行けない、行きたいとは思ふんだけどどうしても行けないという子もいます。それから、もつとかわいそうなのは、学校の中で壁とかに使っている有害物質にアレルギー反応を起こしちゃつて、これも本当に物理的にも行けないわけですね。これは学校に行くとアレルギーが起きちゃうので行けない、こういう子もいます。そういう子と、行けない場合も含むのが不登校というふうに考えてください。

不登校に関しては、文部科学省の方で統計をずっととつていまして、三〇日以上欠席したケースと五〇日以上欠席したケースというのをとっています。毎年毎年かなりのペースでふえ続けています。一番最近で言つと、三〇日以上欠席をした生

徒が一二万人を突破したと言われていますね。平成一二年度に全国の小中学校で三〇日以上欠席した生徒が一二万四二八二人だそうです。三〇日も学校に行かないなんて勉強もついていけないだろうなと思うんですけれども。

不登校というのはそういう意味で言うとか社会問題というか、一定の現象としては、ある意味定着をしていますし、ふえていく問題だと思います。不登校の問題で一つだけわかっておいていただきたいのは、学校に行かないのはいけないことなのかどうか。三ページ目の②ですね。不登校は悪いことなのか。ここだけは考えてもらいたいです。

小中学校は義務教育と言いますよね。義務教育と言いますけれども、これはだれの義務なのかですね。学校教育法を法律家らしくちよつとだけ言うと、学校教育法が定めているのは、保護者に対して自分ちの子どもを小学校に就学させる義務、中学校に就学させる義務がありますというふうに条文上書いてあります。これは気が向いたら後で読んでもらうとわかりますけれども。それから、憲法二六条には子女に普通教育を受けさせる義務というのが書いてあります。

少なくとも全部、この条文は三つとも、子どもの義務じゃないですね。子女に普通教育を受けさせる義務と書いてある、受けさせるのはだれかといったら親ですからね。学校教育法も保護者の義務ですから、子どもの義務じゃないんです。だから、義務教育は子どもの義務じゃありません。親の義務です。

何でこういう法律があるのかということなんですけれども、昔のもっと貧しい時代は、子どもが働いてくれればそれだけ家の稼ぎも上がりますから、学校へ行かせないで働かせる親というのがいっぱいいたわけですよ。それでは子どもがかわいそうだし、豊かな人生にならないでしょうということ、義務教育なんですね。だから親の義務です。だから、学校に行かない子どもが義務教育に違反しているからと言っても、子どもは別に違反していません。

それと、学校といったときの学校が、いわゆる学校教育法で今認められている小学校、中学校だけでなければいけないかどうか。もう一つの問題はそこですよ。学校教育法はもうはつきり、小学校とか中学校とか定義を書いて、文部科学省

の定める基準で設置しろと書いていますから、ここで行かせる義務というのは、まさに典型的な小学校、中学校を想定しています。だけれども、憲法の方は、別に小学校に行かせる義務、中学校に行かせる義務とは書いていないですね。普通教育を受けさせる義務と書いています。だから、憲法の方が規範としては上ですけども、別に小学校に行かせる義務が、中学校に行かせる義務が憲法で決まっているわけじゃないと。

この話はどこにつながるかというと、その下に書いてある、そういう意味で言うと、最近いろんな教育機関、フリースクールですとかチャータースクールだとか、こういういろんなことを考えて動き出している活動というのがいっぱいあります。多分、来週来る子の中にはそういう子もいるんじゃないかなと僕は勝手に思っているんですけども、小中学校に行かないでフリースクールへ行っている子とかいるんじゃないかなと思っっていますが、フリースクールとチャータースクールが何なのかというのは、一応ここにちよつと書きましたけれども、いわゆる既存の小中学校じゃなくても、その子が育てられればいいんじゃないかという発想で自由につくっている民間の団体だったり、チャータースクールというのは、今まだ日本にはないですね。一個もないですけども、これからできるかもしれないですが、そういう仕組みを使ったり、必ずしも不登校が悪いことではないし、学校に行かなきゃいけないことではないと。その子がもっと豊かに育つことができれば、いろんな選択肢があってもいいんじゃないかなというのが、不登校問題を考えるときの一つの考え方だと思ってください。

ちなみに、子どもの権利条約というのがあって、子どもの権利条約をベースにして、それを地元にアレンジするのが子どもの権利条約ということだと思ってもらえればいいんですけども、子どもの権利条約という国際条約があって、日本も批准、参加しているんですけども、そこにはどう書いてあるかというと、教育を受けさせる義務がやっぱり書いてあります。ただ、子どもの義務はやっぱり書いていない。それから、教育を受けさせる義務のところ、二九条の二項というところに、「この条又は前条のいかなる規定も、個人及び団体が教育機関を設置し及び管理する自由を妨げるものと解してはならない」

と書いてあります。この後に、そのかわり最低限度の基準を満たしてくださいというふうに書いてありますけれども、要するに最低限度の基準さえ満たせば、個人及び団体が教育機関を設置し、管理する自由というのはある。子どもがそこに通うことも子どもの権利条約上は認められている、そういうふうになっています。

駆け足で来ましたが、今の世の中、出だしのところでも言いましたけれども、少年法が厳しくなったというふうに言われていますし、教育改革だと言っているいろんな教育基本法の改正だとかがやられています。僕も大人なんですけれども、基本的にそういうことを進めている大人の人が思っているのは何かというと、出だしで言った、子どもというのは何を考えているのかわからん、変なやつばかりだ、野放しにすると何するかわからん、甘やかすとつけ上がる、そういう感覚なんですよ。だから厳しくすればいい、管理をすればいい、悪いことをするやつは出席停止で学校に来させないようにすればいい、そういう発想があります。

だけれども、今日ずっと言ってきたみたいに、子どもというのはそんなに異質なんですか。違うと思うんですよ。みんな子どもだったし、子どもだった人が大人になっているし、大人になったから偉そうなことを言いますが、子どものときにはみんなそれなりにいたずらもしたし、悪いこともしたし、後ろめたいこともしたし、それでいろいろやって、失敗して、成長して、それで大人になるわけですから、みんなおんなじなんですね。今の子どもが異質なわけじゃないですよ。世の中みんなおんなじだと。だから、子どもをそういう信頼しない考え方で法律をつくったり制度をつくったりというのが今の世の中の動きになっていますけれども、これに対しては僕らは非常に危機感を抱いています。

何でこんなに子どもを信頼しない社会になっているのかということなんですけれども、信頼されていないのは子どもだけじゃないです。大人も信頼されていません。大人同士でも信頼されていない。

きょう、この講義の前に、ちょっと別の学部の先生なんかと、ちらっとお話をしていたんですが、学級懇談会をやっても、

親は自分の子どものことだけを気にして、学級全体をどう運営するかみたいな問題には興味がないと。自分ちの子がどうなのかだけを先生と会話をしているという話が出たんですけれども、大人もそういうふうに余裕がなくて、全く全体をどうするかという目はないですね。

あと、その話のときに僕がちらつと言ったのは、マンションの管理組合みたいなものがあって、管理組合だからみんなで管理をしていかなきゃいけないんだけれども、管理組合の運営なんてもう人任せで、全然気にしない人っていうのが世の中にいっぱいいますし、管理組合の中で仲間外れとか、いじめとか、そういうことは実際あります。そういう相談が来ます。大人同士の間でね。組合の役員に今年もなろうと思ったら、やめろと言われて、勝手に議決をとられて除名だと言われた。どうしたらいいでしょう。まさに子どものいじめと一緒にすよ。そういう大人社会です。

ちょうどこれから子どもから大人になる学生が今一番ここに多く聞きに來ているんですけれども、大人になると何かが劇的に変わるわけではなくて、子どものときに持っていた価値観のまま基本的には大人になっていきますから、今と一〇年後と、自分が全く変わるわけじゃないですよ。今の自分と一〇年後の自分は連続しています。だから、今どう考えているのか、これからどう考えなきゃいけないのか、常に変わっていくかと思わないと変わらないと思うんですね。

大人になって、大人がやっぱりお互いに信頼し合って、お互いに相手を認め合って、そういう社会をつくっていかないと、子どもにだけそういうことを求めても無理だと思いますから、大人自身が自分たちをどういうふうに生きていきたいのか、他人とどういう関係をとりたいのか、もつと真剣に考えなきゃいけないのかなというふうに考えています。

それと、この話にもつながるんですけれども、大人と子どもというのは連続していますから、子どもは未成熟で中途半端だから大人とは対等じゃないんだという、この発想は間違っていると思います。子どもには大人の持っている権利と同じものが基本的にありますし、そのほかに子どもだけが持っている権利、成長発達権という大事な権利があります。成長して発

達する権利。これは大人になるともうなくなります。この権利は確かにありますけれども、子どもの権利と大人の権利というのは基本的には連続して同じですから、選挙権はどうなんだって議論がありますけれども、選挙権だって一八に下げてもいいんじゃないかっていう議論も今やっていますけれども、大人と子どもというのは連続をしていて、どっちかが偉くてどっちかが劣っているという関係ではない、これを基本的な考え方にしないと世の中はうまく成り立たないだろうなと思っています。

それが、子どもと大人のパートナーシップを大切にすると書いていますけれども、そういう考え方で川崎の子どもの権利条例がつけられたというふうに聞いています。僕自身は直接かわっていないですけれども、基本的に大人と子どものパートナーシップというものを非常に重視したというふうに聞いています。

四番目。これはまだまだ世の中では少数なんですけれども、子どもが窮屈になっている原因の理由として、僕らが最近すごく気にしているのは遊びの問題。もっともっと遊べる世の中じゃないとだめなんじゃないか。場所の問題もそうですし、時間の問題もそうですし、いろんなことを自由にやってくる中で伸び伸び育つということが本当にできるので。

これは、私も親なんですけれども、親としての自戒も込めてなんですけれどもね。子どもと一緒にどこかに行くと、ずっと見ちゃうんですね、やっぱりね。何か危なそうだったら、危ないと言っちゃうんですよ。何か悪いことをすると、やめろとかって言いたくなっちゃうんですけれども、これを大人がやっているのだめなんだと思うんですよ。危ないっていつでも、一〇メートルのかけから落ちそうだったら、やっぱり危ないからとめますけれども、これが一メートルのかけだったら、極端に言えば、骨折するかしないかぐらいの問題ですよ、はっきり言えば。そこを大人が我慢できるのかどうか。

子ども同士のいじめがあったり、兄弟げんかがあったときに、できるだけ子どもに解決させるようなことができるかどうか。そういう中で、子どものちょっとした悪を許容してあげる中で、本当に伸び伸び育つんじゃないのかなというふうに思

っています。それが生命力というか、社会力というか、他人との関係でも自分が大事にされていく、人も大事にできるとい
う、初めてそういう人間に育てるのかなというふうに思っています。

すみません、時間がかなりオーバーしちゃったんですけれども、以上で終わります。(拍手)